

第17回 座・高円寺
ドキュメンタリーフェスティバル
コンペティション部門 入賞

山形国際ドキュメンタリー映画祭
2025
ともにある Cinema with Us

震災で家を失って、人生が動き出した。

三角屋の

交差点で

At the Triangle Intersection

古い、介護、役割の喪失。
原発事故で帰れなくなった99歳の母と息子夫婦の、3年間の記録。

監督・撮影：山田徹

「三角屋の交差点で」プロデューサー：加藤成子 編集：PHAM Thi Hao 山田徹 整音：川上拓也 デザイン：北野亜弓 (calamar LLC) 製作・配給：インプレオ
2025年 | 日本 | 95分 | 5.1ch | DCP ©Toru Yamada / IMPLEO Inc. sankakuya-film.jp

英語字幕付き上映 Screening with English Subtitles

震災の先で選ぶ直す。家を、「私」を。



STORY

2011年の東日本大震災と福島第一原発事故から7年。浪江町からの避難を余儀なくされた一家は、故郷に戻るか、新たな生活を選ぶかの狭間で揺れていた。震災を機に長年の仕事を手放し、いわき市の復興公営住宅で暮らすなかで、家族の役割や関係性も静かに変化していく。

99歳の母テツは、記憶が薄れゆくなかでも、生まれ故郷・大熊町への想いを離さない。寡黙な息子タケマサは母を敬いながらも、介護の多くを妻シゲコに委ねている。役割を担い続けてきたシゲコは、家族のなかで当然とされてきた立場や、自身の生き方を見つめ直し始める。

土地を失ったあと、家族はどこへ向かうのか。役割が揺らいだとき、人は何を抛り所に生きていくのか。

本作は、揺らぎのなかにある一家の日常を通して、「家」とは何か、「私」とは何かを静かに問いかける。

監督の問いはじまり

山田徹監督は、これまで福島をフィールドに映像制作を続けてきた。前作『新地町の漁師たち』(2016)では、海と土地に根ざし、生業を継ごうとする人々を撮影してきた。本作が向き合うのは、震災によって土地や役割を失いながらも、その喪失をはっきりと言葉にできないまま生きる家族である。震災後を生きるとはどういうことか。自由は、どこまで祝福で、どこから不安に変わるのか。その問いは、やがて私たち自身の足元へと広がっていく。



家も家業も失って
あっ、なんか自由だなんて。
スキップでも
したくなるなんて

認知機能が衰える中、
鮮明になる思いは一つ
大熊町の生家に
帰りたい…

家も家業も失って
家督息子の俺は
日々何する？
母親の老いる姿には
目を背けていたい



作品概要
English Synopsis

